# アルベール・カミュの無神論的実存主義の裏面を彩る映像

川　神　傅　弘

## 1．アルベール・カミュの政治的な位置

アルベール・カミュは無神論を終始標榜したが、その無神論をわれわれは言葉通りに受け取ることが出来るだろうか。この、彼の言う無神論というタームをわれわれは字義通りに受け入れてもよいのであろうか。カミュが執拗に拘る無神論という概念の意味するところは奈辺にあるのか。カミュが意図するところを越えて、何かそれ以上、それ以外のものであるのではないかという疑惑と期待を込めて論考を進めてみたい。この問題を探るための対象は、おのずから彼の処女作と見なされる文学作品『異邦人』及び随筆的趣の断章である『シジフォスの神話』『反抗的人間』になるであろう。

ところで、カミュが『異邦人』で大成功を収めた1936年当時のフランス社会では、全体主義totalitarismeが云々されていた。その言辞はもっぱらナチス・ドイツの政治体制について言われることが多かった。が、そのうちに「スターリンのロシアこそ全体主義以外の何ものでもない」とするソヴィエト連邦の現状を憂える声に変っていった。しかしながら、フランスの人々はそれを認めることに躊躇があった。というのは、彼らには「ソ連は社会主義の祖国であるから、共産党の政治指導の在り方を直截的に非難することはタブーである」という多分に行きすぎた思い込みがあったからだ。つまりフランス人は、ソヴィエト連邦は理想郷なり、という勝手な妄想を育んでいたのだ。しかしながら、当時ソヴィエト連邦では既に体制として恐怖政治が敷かれており、極めて自由の無い状況が続いていて、政府に不利な発言などすれば、たちまち強制収容所に収

容されてしまうような政治体制が訪れていた。とは言え、ソ連に『均質的で普遍的な社会』という《理想郷》実現の夢を託していたフランス知識人は、そのような報告を天から無視した。

楽天的進歩史観の持主であるサルトルとメルロ＝ポンティは、いち早くソ連内部における強制収容所の存在を知ったが、その情報が彼らを動揺させることはなかった。ツヴェタン・トドロフが指摘していることだが、サルトルは「事実の確認に関心を持たなかったので、ソ連国内の過酷な状況が見えなかったのだろう」と語るが、いずれにせよサルトルは飽くまでもドグマに執着する盲目的信者の姿勢を崩さなかった。この件についてツヴェタン・トドロフは更に『国替えを余儀なくされた人』*L'Homme dépaysé* において、ヘーゲルの歴史哲学の観念、謂わば進歩の観念がサルトルを魅了した事実を指摘し、それがサルトルの情勢判断の誤りを招いた可能性を指摘している。

しかし、サルトルとメルロ＝ポンティは、「たとえ収容所が有るとしても『それはソ連においては許されるべきもの』と、開き直ってしまった」のである。その弁明の先鞭を付けたのはメルロ＝ポンティであった。彼は『ヒューマニズムと恐怖政治』*Humanisme et Terreur* を著し、当時ともすれば右傾化しつつあったフランスの知識人を呼び戻そうとした。

こうした動きに敏感に反応したのがアルベール・カミュである。確かにカミュは嘗てドイツ占領時代 maquis マキ（第二次大戦中のレジスタンスゲリラ組織）に属していたこともあったが、その頃はもはや政治的には左派でも右派でもなかった。ところが、戦時中はノンポリであったサルトルの方が逆に、政治にのめり込んでいったのである。彼は当時フランス知識人に浸透し始めた「歴史は段階的に発展する」というヘーゲルの歴史哲学の観念に乗っかる風潮に関心を寄せた。具体的には「歴史は段階的に発展する」という歴史哲学の観念である。「段階的」というタームが意味するもの、それは「資本主義 capitalisme の次の段階に来るものは共産主義 communisme」であるという安易で漠然とした予測でもある。歴史は時間と共に発展する、というヘーゲルの根拠薄弱で安直な進歩思

想でもあった。

それは言わば「進歩史観」とも称されるべきもので、サルトルはその進歩史観に魅せられる。しかしその生き方に密着することはなかった。彼が常にcommunisteに並行する行動をとり続け、全体主義思想を擁護した裏にはフランス社会に蔓延するこうした思想的背景があったことは否めない。彼はcommuniste共産主義者により沿う行動をとり始める。そこには嘗ての「即自存在」や「嘔吐」に苦しんでいた頃の姿は全く見当たらない。いわば彼は同時代人の作家カフカの代表作『変身』の主人公グレゴール・ザムザの逆の姿に似ている。ある朝目覚めてみると自分が巨大な蛆虫に変身しているのという、奇抜かつトリッキーな情景で人心を捉える悪夢的な童話ではない。むしろサルトルはその逆である。作家と物語の主人公を並列に並べて論じるのは意味のないことかもしれないが、それでも同時代に生きた二人の人間の在りようは感じることができる。彼ら現代人は孤独であり不安でもあるのだ。それが実存主義文学の根底にある孤独と不安である。

実は、フランスでは第二次大戦終了前後から、民衆の自由や人権抑圧の政策が敷かれたソ連の現状に関する情報が夙に伝聞ながらも囁かれていた。例えば1936年ソヴィエトへの旅行から帰国したアンドレ・ジッドは、『ソヴィエト紀行』*Retour de L'U.R.S.S.*を著した。その紀行文の中で、彼は「ソヴィエトにおける強制収容所の存在」を示唆する発言をした。しかしながら、ロマン・ロランやアンリ・バルビュスといった大物作家をはじめとする知識人たちが、こうした報告を一切認めず、逆にその圧力のために、ジッドは『ソヴィエト紀行修正』を出さざるを得なくなったほどだ。

## 2．自由を圧殺する全体主義

第二次大戦中の1940年、ソ連秘密警察が捕虜にした２万人を超えるポーランド人将校が虐殺された。43年、ソ連に侵攻したドイツ軍がスモレンスク郊外で数千の射殺死体を発見した。その場所がいわゆる〈カチン

の森〉である。当初はナチスの犯行と見なされ、ソ連も同様の主張を繰り返したが、その事件から50年後の1990年４月になってやっとソヴィエト大統領ゴルバチョフがソ連の責任を認めて、公式に謝罪した。

この問題に関して、映画監督のアンジェイ・ワイダは読売新聞紙上で「全体主義の大罪」として、次のように語っている。「それは一党独裁の支配の下での密告、追放、強制収容所送り、拷問、暴力、宣伝活動（プロパガンダ）などの手段を駆使する過酷な人民の抑圧である。[1)]」

ところで、イギリスの『タイム誌』によれば、この全体主義というタームはイタリアの独裁者ムッソリーニが唱え始めて、その後世界中に流布したものであった。ムッソリーニ自身が全体主義者であったので、その発言は洵に奇妙なことになった。『全体主義の起源』を著したハナ・アーレントは、19世紀ヨーロッパの反ユダヤ主義や人種差別論、帝国主義の高揚などが〈全体主義〉の一語に収斂されてしまったと感じていた。

彼女は「19世紀の反ユダヤ主義の…直截的で純粋な所産はナチズムではなく、反対にシオニズムだった。少なくともその西欧的なイデオロギーの形態においては、シオニズムが一種の反デオロギー、つまり反ユダヤ主義に対する回答だったのである……。ユダヤ人の自意識は反ユダヤ主義によって造られたものに過ぎない事実を意味するものではない。バビロニアの補囚以来、常に離散の恐るべき逆境に堪えて、民族の生存を図ることに心を砕いてきたユダヤ人の歴史をあらましなりとも知っていれば、こうした問題についての最近の神話 ── ユダヤ人なるものは他人からユダヤ人と見なされ規定されているものである、というサルトルの〈実存主義的〉解釈以来、知識層のあいだで、言わば流行になっている神話を退けるには充分だろう」[2)] と語っている。

端的に言って、19世紀ヨーロッパにおける「ユダヤ人の自意識は反ユダヤ主義によって造られた」という意味には、実はかなり複雑な内容が盛り込まれている。直近では第二次大戦中のドイツによる、アウシュヴィッツ等のラーゲリに何十万というユダヤ人を押し込めた事件をはじめ、ヨーロッパにおけるユダヤ人嫌悪には長く深い歴史がある。

例えば文芸においても、16世紀イギリスのシェークスピアの劇作『ベニスの商人』では、主人公ポーシャ姫の婚約者アントニオは親友のために、ユダヤ人の高利貸シャイロックに多額の借金を申し込む。シャイロックは返済期限までに返せないときはアントニオの体の肉１ポンドを要求するという契約を結ぶ。結局、密かに男装して弁護士になりすましたポーシャが、「肉１ポンド」の契約書には「血」は含まれない、というポーシャの屁理屈にも似た機転によってアントニオが助かるという喜劇である。このように西欧・東欧・ロシア等において、長年月にわたってユダヤ人は忌み嫌われてきた。ユダヤ人は世界各地に散らばって住まざるを得なかったので、自然に祖国建設の想いが募ってゆく。このユダヤ民族の祖国・パレスチナの復興を目指すユダヤ民族運動を称してシオニズム Zionism と言い、そのユダヤ民族運動に関連した映画は20世紀においては「十戒」「ベンハー」「出エジプト記」等々の一大ページェント的作品に結晶した。かく流行した作品は、いわばヨーロッパの「時代劇」であったが、今やその影さえ見えない。

## ３．アルベール・カミュとシモーヌ・ヴェーユ

このテーマをより際立たせるにあたっては、無神論者と敬虔なキリスト者を対置する方法が最適であると思われるので、ここでは同時代の作家として一方にカミュ、他方にはシモーヌ・ヴェーユを配することにした。両者が、この役割を担うに相応しいキャスティングと思われるからである。カミュは1913年、ヴェーユは1909年の生まれでほぼ同世代であり、この無神論者とキリスト者というテーマを掘り下げるに最適な比較材料となる筈だ。言い換えればこの二つの人格は、テーマの対極的指標であると言っても過言ではない。

### アルベール・カミュの立ち位置

カミュはアルジェリアの貧しい家庭で育った。後世の名声は紛れもない事実だが、青年期の彼の生活は家庭の家族を苦しめる、酒と賭け事に

明け暮れたものであった。こうした生活に耽溺した人間にありがちな性向、周囲の人々をすべて巻き込んで、死の本能のままに行動するフロイト流の考えは若きカミュを苦しめた。要するに、当時のカミュは世界的展望や、より良き社会への見通しの可能性を夢見るタイプの人間ではなかった。『反抗的人間』において彼はニーチェの思考「社会主義とはキリスト教の退化したものに過ぎない」「社会主義は、凋落したキリスト教の更に堕落した表明である」などの考えに同調する。したがってカミュの想いは社会主義や博愛主義と対立するものである。

ところで、彼は工場労働者の条件に関してシモーヌ・ヴェーユの意見に賛同してこう語っている「工場労働者は二重に非人間的である、第一に金銭、第二に尊厳性を剥奪されていると言うのは正しい[3)]」

カミュは『反抗的人間』「予言の失敗」の項で語る。「ヘーゲルは威厳をもって1807年に歴史を終える。コントは1857年に死ぬが、講壇に登って、ついに誤謬を悟った人類に実証主義を説教する用意をしている。マルクスもまた、同じような盲目的なロマン主義的考えをもって、階級なき社会と歴史的神秘の解消を予言している。「生産の増加は必然的に力の拡大をという叫び、絶えざる労働、絶えざる苦難、永続する戦争を招いた。19世紀末と20世紀初頭の革命運動は、初期キリスト教徒と同じように、世紀の終末とプロレタリアートによるキリスト再来との期待のなかに生きた[4)]」

カミュの究極的死生観はあくまで悲観的かつ絶望的な彩りに染め上げられており、死に対する彼の想いは『シジフォスの神話』で赤裸々に開陳されている。カミュは「死は決して一切の終末ではない、生が――たとえどれほど健康と力に満ち溢れた生であれ――われわれにもたらす希望よりも、無限に希望を死は含んでいるのである」と語るが、その言に反して「希望」は明るい彩りのものではない。むしろそれは「絶望」の裏返しのようにしか見えない。カミュは*L'Homme révolté* の*RÉVOLTE ET ART*『反抗と芸術』の項で次のように語っている。

Sade figurait à ce point de vue un exemple limite ; le roman de refus total où la révolte est devenue blasphème. Il a édifié un univers d'une logique cruelle, sans fissure, tout entier animé par la haine de la création et le refus de Dieu. L'homme n'y a qu'une dimension psychologique, celle du mal, puisque Sade ne voulait reconnaître qu'une unité malfaisante à ce monde. En cela, dailleurs, il s'éloigne du son mouvement primitif de révolte, il se sépare en fait du monde et crée à sa manière un monde édifiant. Bernardin de Saint Pierre et le marquis de Sade, avec des indices différents, sont les créateurs du roman de propagande.[5)]

「サドはこの問題について一つの限定的範例を示した。つまり、それは反抗が神を全面的に冒涜する作品、つまり反抗が神を全面的に冒涜する小説である。彼（サド）は天地創造に対する憎悪と、神を拒否する全体的な激情に亀裂の無い、狂おしいまでの論理の世界を構築した事実を認めざるを得ない。人間はこの世界においては、有害な構成単位に過ぎないという認識しか持ちえないのである。そのため人間は事実として世界から自分を引き離し、反抗という自分の流儀で世界を構築する。ベルナルダン・ド・サンピエールとサド侯爵は、様々な徴候からして、そうしたものの布教宣伝小説である」

カミュの精神の住まう座標は四つの象限の埒外にある、真に暗い世界であり、それは次に紹介するヴェーユと真逆で、そこには神秘主義的なものは皆無と言っていいだろう。

### ヴェーユの立ち位置

一方ヴェーユはパリの裕福な家庭で育った。しかしながら、ヴェーユは一風変わった考えの持ち主であった。パリに生まれ、高等師範学校を卒業して哲学教授資格を取得する。頭脳明晰で、かつ神秘的魂の持ち主であった彼女は、不幸な人々への慈愛と圧制者への怒りを持ち続けた。ルノーの自動車工場では労働者として働いた。が、このような仕儀は一

般人から見れば、裕福な家庭の子女の「貧乏人ごっこ」と見えなくもない。また、スペインの人民戦線にも参加するという破天荒な行動に身を任せる、かなり異色で特異な人柄と言える。彼女のキリスト教への帰依の在りようは決して中途半端なものではない、というよりむしろ人を面食らわせるほどに現実感覚を欠くものであったが、そのためその禁欲主義は大袈裟と見えなくもない。肋膜炎を患った後のひ弱な身体であったにもかかわらず、不屈のエネルギーで畑を耕し、道端にあった桑の実を食して飢えをしのぐ生き様を想像してほしいのであるが、それでもその堪えがたい苦痛を伴う修業的な、一般人から見れば、禁欲さえも所詮良家の子女がイエスに抱く、膨張し続ける憧れとしか見えない。従って内心の浄化を求める彼女の言葉は神秘主義者的であって、思弁哲学者のものではない。

その意味で、部分的にカミュが賛意を示したヴェーユの思惑について触れてみたい。

『重力と恩寵』*La Pesanteur et la grâce* より、

> Le soleil luit sur les justes et sur et sur les injustes… Dieu se fait *nécessité* : Deux faces de la nécessité : exercée et subie. Soleil et Croix.[6)]
>
> 太陽は義人にも、そうでない者の頭上にも等しく輝く。神は自ら不可避なるものとなる。不可避なものの二局面、つまりそれは太陽と十字架である。

> L'amour est un signe de notre misère. Dieu ne peut aimer que soi. Nous ne pouvons aimer qu'autre chose.[7)]
>
> 愛は私たちの悲惨の徴である。神は自分しか愛することが出来ない。私たちはそれ以外のものしか愛することができない。

> Aux yeux de Platon, l'amour charnelle est une image dégradée du véritable amour. L'amour humaine chaste（Fidélité conjugale）en est une

image moins dégradée. L'idée de Sublimation ne pouvait surgir que dans la stupidité contemporaine.[8)]

プラトンにとって、肉欲の愛は真の愛が堕落した姿である。貞潔なる人間愛（夫婦の貞節）は、それだけ品位あるものと言える。

ところで、Gustave Thibon は1990年、「半世紀後の追伸」*Post-Scriptum, cinquante ans après* と題してヴェーユの『重力と恩寵』に関連して、次のような献辞を呈している。「この作品は『心情の光』『精神の糧』であり、それが実現される必要はない。それは「いかなる時代でも、如何なる場所においても、のしかかってくるあの存在の頂上から発散されるものであるからだ」と語っている。

プロレタリア階級が無限に増大することはなかった。マルキストの誰もが奨励したはずの工業生産の工場そのものが、著しく中産階級を増加させ、新しい社会の階層、つまり技術者の階層を創造さえした。かくして、プロレタリアートの使命という観念は、歴史の中で、現在までついに具体化されなかった。このことはマルクシズムの予言の挫折を要約している。彼女は時代の変化は時代の内容の変化を意味しないことにやっと気付いたのだ。ゆえに福音書を日々の糧とする彼女は「アリストテレスこそ、偉大な神秘思想の伝統を最初に葬り去ろうとした人物」と見做さざるを得なかった。

## 4．カミュが　こと挙げする

1936年７月第一次モスクワ裁判の開廷以降スターリン（鋼鉄の人の意味で、本名ではない）の「大粛清」が始まる。大粛清の大方は見せしめと見せかけの裁判であり、でっち上げの無実の罪で処刑されたり、強制収容所で亡くなった人は、2,000万人とも言われている（ロベール・コンケストは1970年刊行の *La Grande Terreur*『大恐怖政治』のなかで、1936-50年強制収容所での死亡者に3,000万人という数字を計上している）。

カミュはこのようなロシアの現状を仄聞するにつけ、サルトルらが殊

更ロシア贔屓の発言を繰り返すことに反対する声明を発せざるを得なかった。かくして所謂『サルトル・カミュ論争』が始まった。数度に及ぶモスクワ裁判・Des procès de Moscou は被告側の弁護士不在、拷問による自白の強要、新聞を利用した世論操作等によるものである事実がフランス側に漏れて、フランス知識人世論は反共 anti-communisme に傾く。

また、ドイツ占領下の1943年ドイツ国防軍兵士に対する政治活動の廉で逮捕され、拷問、監禁の後にビュッヘンバルトの収容所に送られ、次々にその他の収容所を移動させられた後で「死の行軍 marche de la mort」と称される困苦を体験したダヴィッド・ルッセが、ソ連にもナチス政権下のドイツと同じ強制収容所のあることを知り、嘗ての収容所仲間に呼びかけて〈ソヴィエト連邦収容所に反対する国際委員会〉を設置した。因みに、ラーゲリ（Gulag, Goulag）という言葉によって初めてソ連の camps のシステムを紹介したのもルッセである。こうしてレトル・フランセーズは素早く反応し、大々的キャンペーンを展開した。かくして反共の勢いが削がれる要因となった。[9)]

先に触れたように、当時フランスでは『歴史は段階的に発展する』というヘーゲルの歴史哲学の観念が流行し始めていた。「段階的に」というのは、「資本主義の次代を担う新たなステップは共産主義 communisme である」と、漠然と予想期待していた事実を意味する。サルトルが常時共産主義と並行関係の行動をとり続けた裏には、フランス社会に蔓延する「進歩史観」が、彼らの頭の中では信仰対象にまで純化凝縮されていたのであろう。一般論的に見ても過激な思想ほど宗教的信仰対象として崇拝され易いように思われるからである。……

その思想的背景は「進歩史観」であり、詰まる所は「スターリン主義」と言う新たな信仰対象であると言い切ることができる。レーモン・アロンの著書 *L'Opium des Intellectuels* からその言を借用するなら、その信仰は“革命と暴力による救済の神話”であり、“選ばれた階級としてのプロレタリアートの神話”、また“左翼の神話と歴史崇拝の神話”でもある。ともあれ一方では、進歩史観の熱狂に躍ることなく、常に醒めた目で時

代を見通すことの出来る思想家がいたことは、フランスにとって救いであったと言わざるを得ない。

結び

カミュの1949年の作品 *La Peste*『ペスト』において主人公リウーと司祭の間で次のような対話が交わされる。

— 世界の秩序は死によって規定されている。だから神にとっても、人間が神なんか信じないで力の限り神と戦うほうがいいのではなかろうか。空に目を挙げずにね。だって神は黙っているだけじゃないか。
— そう、僕にもわかる。だが、君の勝利は常に一時的勝利なのだ。
— でもそれだからと言って闘いを辞める理由にはならない。

主人公リューと共にペストと戦った人々も徐々に倒れ、死んでゆく。親友も妻も亡くなる。ついにその終息と共に市の門が開かれ、花火が打ち上げられた時、リューはこのペストの体験と犠牲者と共に戦った体験の証言者として書き記す決心をするのである。

— 人間の中には軽蔑すべきものよりも賛美すべきものの方が多くある。彼はその事実のみを皆に知ってほしいのである。

ここには人間にとって逃れ難い、生老病死の四苦を前提とする諦観を下敷きにした、人間相互の連帯感への情熱も渦巻いているように思われる。

アルベール・カミュはネガティブもポジティヴも関係のない地平に身を置いていた。それは不条理の意識と言う、浮遊する空間である。ヴェーユは殊更ネガティヴな道を選んでその道に執着し、その道に拘った。

その行為こそが、却って彼女に幻想を作り出させることになったように思われる。つまり、逆に彼女を執着から逃れ難くさせたのではあるまいか？傍目から見れば、それこそが彼女の言う悲惨 misère であったように思われる。ある意味で、彼女はその都度“悲惨”を求め続けた苦行者的な人間である。

人間には“軽侮すべきものもあるが、賛美すべきものもある”というカミュの人生観に比して、やはりヴェーユのそれは苦しい。狂信ではないが、やはり、彼女の生き方は、常に事物や人間或いは、神に執着し、苦しみを求め、探し当て、それを乗り越えた途端に次なる苦しみを求めるという意味で、やはり「苦行僧」の生き方と言わざるを得ない。

（本学名誉教授）

**註**

1）アンジェイ・ワイダ、「カチンの森」ワイダ監督に聞く「全体主義、人間を抹殺」、読売新聞、2009年11月10日。

2）ハナ・アーレント、『全体主義の起源 I』、みすず書房、大久保和郎訳、緒言、7頁。

3）アルベール・カミュ、『反抗的人間』、新潮世界文学、カミュII、p.594.

4）同上、p.589.

5）Albert Camus, *L'Homme révolté*, *Œuvres complètes*, III, *NRF.,* p.1213.

6）Simone Weil, *La Pesanteur et la grâce,* La NÉCESSITÉ ET L'OBÉISSANCE, p.96.

7）*Ibid*., AMOUR, p.120.

8）*Ibid*., p.121.

9）エーリッヒ・フロム、『自由からの逃走』日高六郎訳、創元新社、昭和44年、上記著書からの引用概略。